

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	宮沢賢治「よだかの星」のギリシャ語訳 〈研究ノート〉
Auther(s)	橘, 孝司
Citation	プロピレア , 20 : 39 - 52
Issue Date	2014-08-31
DOI	
Self DOI	
URL	http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00039091
Right	Copyright (c) 2014 日本ギリシア語ギリシア文学会
Relation	



宮沢賢治「よだかの星」のギリシャ語訳

橘 孝司

日本文学作品のギリシャ語訳

現代ギリシャを代表する文学者のうち、詩人ではコステイス・パラマス、カヴァフィス、セフェリス、エリティス、リツォス等、散文作家ではカザンザキス、セオトカス、サマラキス等の長編作品が、直接ギリシャ語から日本語に訳されている。また短編作品の翻訳も少ないながら存在する。

翻って、日本文学作品はどの程度ギリシャに翻訳紹介されているのだろうか。

高橋（1991）は、アテネの書店の棚で日本文学作品の翻訳書を目にすることはほとんどない、と述べている。以来 20 年以上が経った現在、書籍として出版社から発行され、入手が容易なものをネットで調べてみると、40 作品以上が見つかる¹⁾。他にも私家版や同人誌に掲載された作品、あるいは日本人がギリシャ語に翻訳したものもあるだろう²⁾。

ただし、日本語からの直接訳がそのうちどのくらいの割合を占めるのか、筆者にはわからない。初めての直接訳は、1990 年のパナイオティス・エヴァンゲリディス氏による永井荷風「雨瀟瀟」だそうである（高橋 1991）³⁾。直接日本語で文学作品を読み、研究するギリシャ人はまだまだ少数派のようだ。

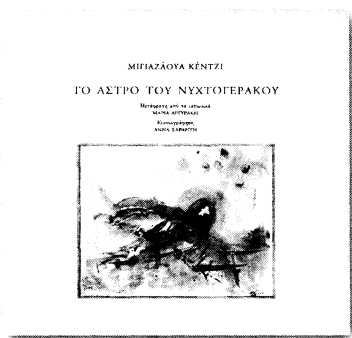
そのような、日本語からの直接訳の試みをひとつ紹介したい。

宮沢賢治作品のギリシャ語訳

取り上げるのは、マリア・アルギラキ女史による、宮沢賢治「よだ

かの星」(Μιγιαζάουα Κέντζι (1999) *Το άστρο του νυχτογέρακου*. Μεταφρ. Μαρία Αργυράκη, Ολκός, Αθήνα, 125p.)

訳者マリア・アルギラキ女史はアテネ大学で英文学を学んだ後、イギリスのシェフィールド大学で日本研究の修士号(2010)を取得。4年間日本に滞在し、朝日カルチャーセンターで日本語を学んだ。流暢な日本語を操り、観光ガイドとして活躍する一方で、1999年初の翻訳「よだかの星」を出版(ギリシャ日本修好100周年記念活動の一環らしい)。その後も、宮沢賢治「銀河鉄道の夜」(2001)、池澤夏樹「イラクの小さな橋を渡って」(2003)、村上春樹「1Q84」(2012-13)、村上春樹「アフターダーク」(2013)などを翻訳している。



本書「よだかの星」は表題作以外に、「双子の星」「注文の多い料理店」「洞熊学校を卒業した三人」「やまなし」「カイロ団長」「猫の事務所」「鹿踊りのはじまり」「水仙月の四日(翻訳題名 Η κόκκινη κουβέρτα「赤い毛布」)」の童話全九篇が収録されている。

アルギラキ女史が惹かれるのは、賢治作品に込められた他者への関心であり、自己犠牲によって外に現れ出る美しい力だという。そのような一種の浄化に、古代ギリシャ悲劇との共通点を見る。確かに「双子の星」や「よだかの星」などには、他人に献身するあまり自分が傷ついてしまう者たちが描かれている。

各作品に一葉ずつ付されたアンナ・サランディ女史の挿絵は暖かい色調で、細やかにストーリーを視覚化している。「猫の事務所」でいじめられる^{かまねこ}電猫の目にはちゃんと涙が浮かび、「落ちているのか、のぼっているのか、さかさになっているのか」分らないよだかは仰向けの姿勢で飛んでいる(上掲写真のように、表紙にも使われている。)

巻末にはアテネ大学神学部で宗教学を教えるステリオス・パパレクサンドロプロス教授の解説が付されている。賢治作品全体の概説というよりも、その思想の核心に直接切り込んでいく。教授は、専門の日本仏教や日本思想の研究に加え、志賀直哉「范の犯罪」、上田秋成「雨

月物語」、安部公房「砂の女」などを直接訳しておられる。

賢治作品のオノマトペ翻訳

宮沢賢治といえば、オノマトペ（擬音語・擬声語・擬態語）の達人として知られる。賢治のオノマトペを詳細に分析した田守（2010）は、豊富な種類のオノマトペを多用するのみならず（p.5）、通常とは異なる使い方や、自ら創作したと思われる独特の語を用いる点（p.7）が賢治作品の特徴だと指摘する。そこでこれを翻訳するとなると大変な困難が予想されるのだが、アルギリキ女史はどのように処理しているのだろうか。

もちろん文学作品の価値は表現技法にとどまるはずはなく、また翻訳作業の評価も逐語訳的な正確さのみにあるわけでもない。が、ひとまず賢治作品の代表的な特徴の一つに絞って、翻訳者がどのような工夫により、日本語とギリシャ語という全く異なる体系の言語の橋渡しをしているのか、その苦労の跡を辿ってみたい。

宮沢賢治のオノマトペはほとんど（活用しない）副詞あるいは名詞（「する」「めく」等と結合して動詞となる場合も含む）である（田守 pp.27-45）。これに対応するギリシャ語の単語を調べてみると、品詞の観点から、大まかに以下の四つに分けられそうである。

- 1 動詞によるもの
- 2 名詞、形容詞、副詞によるもの
- 3 前置詞によるもの
- 4 間投詞によるもの

巻頭に置かれた「双子の星」から、それぞれの例を挙げておこう。

1 動詞によるもの

ギリシャ語動詞の中に当該オノマトペの表す音声や様態を包み込んで表現する場合。説明的になるが、どれだけ近い意味の動詞を当てるとかが鍵になる。例えば、

「あちこち星がちらちら現われました⁴⁾」

Τ' αστέρια εδώ κι εκεί άρχισαν να τρεμοπαίζουν

ここでは、「ちらちら（光る）」という様態が τρεμοπαίζω「(炎や怒りの)強さが増減する」という複合動詞（τρεμο+παίζω）で表現されている。

次は、^{さそり}蠍が尾を引きずって歩く場面。

「長い尾をカラカラ引いて」

κροταλίζοντας τη σερνάμενη ουρά του

「尾をギーギーと石ころの上に引きずって」

έσερνε την ουρά που κροτάλιζε στα βότσαλα

「引く・引きずる」行為自体は動詞 σέρνω が表現するのに対し、石の上でたてる音は別の動詞 κροταλίζω が受け持つ。「カスタンネットのような音を出す」という特殊な意味のこの動詞が、硬いものとぶつかり合っ
て響く鋭い音を効果的に表現している。ただし、「カラカラ」「ギーギー」と原文では異なる語が、ギリシャ語では同じ動詞になっている。田守 (pp.191-2) は明るく響く「カラカラ」は悠然とした歩きつづりを表すのに対して、こもった「ギーギー」は瀕死の怪我を負った状態を表現するのだろうと推測する。

猛スピードで飛ぶ彗星が急に曲がる様子にも賢治独特のオノマトペの使い方が見られる。普通「ミシミシ」はこのような場合は使わない。古い木や板が軋む音が本来の用法だろう（田守 p.239）。

「身体が・・・ミシミシ云うんだ」

Το σώμα μου τότε τριίζει

ギリシャ語 τριζω の方も「(油の切れたドアの蝶番などが) 軋む」が普通の使い方だから、原文の味わいを再現している。

2 名詞、形容詞、副詞によるもの

ギリシャ語の名詞と形容詞は形態の上で共通していることが多く、また、それらの形容詞の副詞的用法というのもあり得るので、三つの品詞をここにまとめておく。

^{さそり}蠍と^{かいす}大鳥が傷つけあった後、歩き出す場面では、どちらのオノマトペにも（形容詞由来の）副詞一語が対応している。

「よろよろ歩き出しました」

άρχισε να περπατάει αδύναμα

「ゆるゆる歩いて（お帰りなさい）」

περπάτα τώρα προσεχτικά

前者が動作の身体的様態をそのまま表現している(αδύναμα「力なく」)のに対し、後者では行動の心理的状态(προσεχτικά「気をつけて」)に焦点が当てられている。

複数の語で訳される場合もある。双子の星たちが新しい衣と靴に着替え、心身の疲れがとれる場面では、

「すがすがしてしまいました」

ένιωσαν φρέσκα και δροσερά

原文は「すがすがしい」からの造語だろうか。ギリシャ語では類似した意味の二つの副詞(ともに「新鮮な、さわやかな」)に訳されている。

「(稲妻が) 向こうからギラッとひらめいて飛んで来ました」

έβγαλε μια λάμψη κι ήρθε πετώντας από μακριά

「紫色の光が一遍ぱつとひらめいて」

βγήκε μια μωβ αναλαμπή

「ギラッと」と「ぱつと」は名詞(二つとも語源的には同じ)で表現し分けられている。一方で別の個所に出てくる「ぎらぎらっと」は次のようになる。

「(稲妻が) ぎらぎらっと光ったと思うと」

πριν καλά καλά βγάλει δυο αναλαμπές

「ギラッと」よりも重複された「ぎらぎらっと」の方が強度や継続の度合いが大きいと感じられるが、この点は μια λάμψη「一つの輝き」、δυο αναλαμπές「二つの輝き」、と凡帳面に訳し分けられている。

形態上、明瞭な副詞の例としては、

「雨がザアッザアッと降って居りました」

η βροχή έπεφτε καταρρακτωδώς

副詞 καταρρακτωδώς「滝のように」を使って、状況を具体的に表現している。

3 前置詞によるもの

前置詞句によるもの。これも状況説明的になるだろう。

ふんぞり返ってやって来る大鳥と、喉の渇きを癒すため水を飲む蠍は、それぞれ前置詞句を伴って(με βήμα βαρύ「重い足取りで」、με την ησυχία「静かに」)描写される。

「のっしのっしと大股にやって参りました」

νά σου κι εμφανίζεται ... με βήμα βαρύ και τεράστιες δρασκειλιές
「ごくごくりと水を飲みました」

πίνοντας με την ησυχία του
傷ついた瀕死の蠍の血が流れる場面では、σαν πίδακας「湧き出る泉のように」という語句を加えてイメージを具体的に膨らませている。
「どくどく空に流れて」

πετιόταν σαν πίδακας χωρίς σταματημό

4 間投詞によるもの

形態論的に語形変化しない語であり、その点で日本語のオノマトペ（それ自体変化しない）に近い。効果的な音をあてるなり、従来の語を変形させるなり、翻訳者の腕の見せどころである。

以下は、頭についた水滴を大鳥がふるい落とす場面だが、同じ状況に対応する音を当てている。

「ブルルツと頭をふって」

έκανε μια φρρρτ!

彗星が飛び始める場面には独特のオノマトペが現れるが、オートバイのエンジン音のような、より具体的なイメージの音で訳される。

「ギイギイギイフウ。ギイギイフウ」

Βρουμ-βρουμ, βρου-βρου-βρου-βρούουμ!

傍若無人に飛び回る彗星の哄笑。

「あっはっは、あっはっは」

Χάα-χα χα-χα χαχα-χάα

翻訳ではこの四種類の方法を駆使しながら、異なる文化コンテキストの中で原典の世界を再現しようと努めている⁵⁾。

以下では、作品ごとに気がついた例を一つ二つずつ検討し、翻訳者の工夫を探ってみたい。

「注文の多い料理店」

二人の似非紳士が猟をした後、山の中で迷ってしまう。この個所はオノマトペ多用の代表例として田守 (pp.5,193-4) にも挙げられている。

「風がどうと吹いてきて、草はざわざわ、木の葉はかさかさ、木はご
とんごとんと鳴りました。」

ακούστηκε ένα δυνατό βουητό ανέμου, ένα μουρμουρητό βγήκε απ' τα
χορτάρια, θροίσαν απαλά οι φυλλωσιές, τα δέντρα έτριξαν.

βουητόは「底から湧いてくるような海や波のうなり」、μουρμουρητόは「ひそひそ声・ささやき声」（それゆえ人の声にも使える「ざわざわ」にうまく対応）、θροίζω「風が木の葉の間を通る時かすれて音をたてる」、τρίζωは「板や木がきしむ」。風の「どう」や木の「ごんごん」は独特の使い方であり（田守 pp.130-1）、翻訳が難しい。ここでは δυνατό βουητό「強いうなり」、τρίζω「きしる」を当てている（「双子の星」で彗星の身体がミシミシいう場合に使われた語）。

風の「どう」は「どうっ」の形で別の個所にも現れるが、
「風がどうっと室の中に入ってきました。」

το δωμάτιο πλημμύρισε από ένα δυνατό ρεύμα αέρα.

のように、別の構文（「部屋は強い空気の流れに満ちた」）に替えられている。一般的な形容詞 δυνατό「強い」と空間的な広がりを含意する動詞（πλημμυρίζω「満たす」）を組み合わせることで、風が一举に部屋に入り込む様子を再現しようとしている。

料理店の真の狙いに気づいた紳士は、

「がたがたがたがた、ふるえだして」

Ἄρχισε να τρέμει σαν το φύλλο

という風に、前置詞句 σαν το φύλλο「葉のように」を補い、具体的に鮮明なイメージを与えているが、これに続く個所は動詞・形容詞を駆使して説明的に言い換える

「『うわあ』がたがたがたがた」

«Ουάαα... » τσίριξε ο ένας, τρέμοντας ολόκληρος

（τσιρίζω「鋭い叫び声を上げる」、τρέμοντας ολόκληρος「全身がふるえながら」。）

「洞熊学校を卒業した三人」

蜘蛛が獲物を待つべく巣を作りあげるときの歌。

「スルスル光のいとをはき、

きいらりきいらり巣をかける。」

μαλακά αφήνοντας μια φωτεινή κλωστή

Υφαί-αινει τη φωλιά της που λαμποκοπά

「スルスル」には一般的な副詞 μαλακά「柔らかく」が対応する。「きりきりきり」の指す様態には、動詞 λαμποκοπά「光輝く」が対応するのだろうが、この語のゆったりとした調べ（「きらきら」「きりきり」とは異なる）は、動詞 υφαίνει「紡ぐ」をハイフンで引き延ばすこと（υφαί-αινει）で再現されている。

同じ工夫は別の個所の狸の歌にも見られる。蚊が飛んできて巣にはかからないだろう、と狸が蜘蛛をからかう場面で、

「くうんとうなつてまわれ右。」

Βζζουν! Μεε-τάα-βολή

Στρί-ψατέπ-ιδέ-ξιά!

擬音語の部分だけでなく、「まわれ右」に当たる名詞・動詞でも間延びした感じを表記上で表そうと試みている。（本来なら Βζζουν! Μεταβολή, Στρίψατε επιδεξιά!だろう。）

次は、なめくじがかたつむりを食べるときの独特の音。

「殻ごとみしみし喰べてしまいました」

κριτσανίζοντας μάλιστα τα τραγανά κομμάτια

「(かたい食べ物をかむとき) かりかり音を立てる」の特殊な意味を持つ動詞 κριτσανίζω を使うことで、「みしみし」と「食べる」をあわせて表現している。

後半では、食欲な狸が不思議な（「念仏」ならぬ）^{わんわんこ}「念猫」を唱えながら獲物を食べていく。

「なまねこ、なまねこ、みんな山猫さまのおぼしめしのおりになるのぢや。なまねこ。なまねこ。」

μεγάλη-Χάρη-Σου, μεγάλη-Χάρη-Σου! 'Ωω τα πάντα σύμφωνα με το
θέλημά Σου, Δέσποινά μας Αγριόγατα (μεγάλη-Χάρη-Σου, μεγάλη-Χάρη-Σου!)

「なまねこ」は「呪文めかして『山ねこさま』をもじったもの⁶⁾」らしい。つまり、「やまねこ」と「なんまいだ（南無阿弥陀仏）」をかけあわせたということだろうか。異文化圏の読者には伝わりにくい場面だが、キリスト教の聖母（Δέσποινά μας）に見立てて、祈りのことばを置き換えることで雰囲気伝えようとしている。

最後には狸の腹が膨れすぎ、音を立ててはじけてしまう。

「ボローンと鳴って」

ακούστηκε ένα χχχράααααα

χρααααは「カイロ団長」（以下参照）でアマガエルが首を切られる時の音と同じだが、ここでは子音も母音も引き延ばされて、破裂した衝撃の強さを表現しようと試みている。

「やまなし」

作品の冒頭で蟹の兄弟が不思議な話をしている。

「クラムボンはかぶかぶわらったよ」

この特異なオノマトベには訳者も苦労したことだろう。「ぶかぶか」をひっくり返し、蟹が泡を吹くイメージを重ねたものだろうか（田守 pp.14-5）。訳文は動詞を変える（γελώ「笑う」、χαχανίζω「ハハハと笑う」、χοροπηδώ απ' τα γέλια「笑って踊り跳ねる」）ことで何とか処理している。

「クラムボンはわらったよ」

「クラムボンはかぶかぶわらったよ」

「クラムボンは跳ねてわらったよ」

Ο Κράνμπον γέλασε, βρε!

Ο Κράνμπον χαχάνισε, σου λέω!

Ο Κράνμπον χοροπηδούσε απ' τα γέλια, βρέι!

また、流れていく山梨を蟹達が追う場面にも特異な語が現れる。

「ぼかぼか流れて行く」

Το έπαιρνε το ρεύμα και το σκαμπανέβαζε απαλά

この動詞 σκαμπανεβάζωは「嵐の際、船が上下に揺れ動く」のような意味で使われるが、副詞 απαλά「やわらかく」を加えて緩やかな感じにしている。

「よだかの星」

強い鷹たちにいじめられていたよだかは弟たちに別れを告げ、天空へ向かって飛び立つ。最初の泣き声はまだ弱弱しい。

「よだかは高くきしきしきしと鳴きました。」

άφησε ένα διαπεραστικό κρώξιμο

しかし、高くのぼるにつれ、その声は力強く、鷹かと見まがうばかりになっていく。

「それからキシキシキシキシッと高く高く叫びました。」

άφησε ένα διαπεραστικό κρώξιμο, που αντήχησε παντού
鳴き声の部分の訳は同じになっている（διαπεραστικό κρώξιμο「貫くような（カラスの類の）鳥の鳴き声」）が、後者には関係節を追加して（που αντήχησε παντού「いたるところに響いた」）、二つの場面の差別化を図ろうとしているようだ。

「カイロ団長」

アマガエルたちがウイスキーで酔っ払って眠りこける騒々しい場面は間投詞によって愉快的感じが醸される。

「ウーイ、ケホン、ケホン、ウーイうまいね。」

Πό-ποο! γκουχ-γκουχ, πόο-ποο

「キーイキーイといびきをかいて」

ροχαλίζοντας φρσςς...φρσςς...σα σφυρίχτρες

「キーイ、キーイ、クワァ、ううい。」

Φρσςς...φρσςς...κουαξ, μιαμμ...!

「ううい、あああつ。ううい。」

Μιαμμ, Α-αά! Μιαμμ!

「ケホン、ケホン」に対する γκουχ-γκουχ は咳の音を表す語らしい。「クワァ」の κουαξ は慣用的にカエルの鳴き声を表す擬音語。「いびきをかいて」の部分には σα σφυρίχτρες「笛のように」が説明的につけ加えられている。

この後、傲慢なトノサマガエルはタダ酒を飲んだアマガエルを脅す。

「首が太いからスポンとはいかない、シュッポオンと切られるぞ」

あえて対比されたこの二語は訳し分けが必要だろう。

είναι τόσο παχύς που δεν κόβεται μ' ένα μόνο χρατς. Χρατς-χρουτς

θα σας τον κόψουν

日本語では、語頭の子音の違い（「ス」「シュ」）と促音・長音の有無（「ッ」「ォ」）により、後者の勢いの強さが出ているが、翻訳は κρατς と κρατς-χρουτς のように、後者に重複表現（しかも -α-/-ου-と母音を変えて）を用いることで、より重々しい感じを出そうとする。しかも、前

者には μ' ένα μόνο 「ただ一度で」と念を入れた説明を付している。

重い石を引っ張るアマガエルたちのかけ声は、

「エンヤラヤア、ホイ、エンヤラヤアホイ」

φωνάζοντας έ εϊ-όπ, όπα, έεϊ-όποπόπ, όπα!

達人のオノマトペの雰囲気を与えるにはこのくらい愉快地弾けた訳が必要であろう。

「猫の事務所」

猫同士が喧嘩を始めそうになる直前、事務長の猫が大声を出して止める場面。

「ジャラジャラジャラジャラン」

΄Ωω-πο-πο-πο-πο-πόπ!

οπ (あるいは χοπ) は短い突然の動きや、相手の動きを止める場合に使われるらしい。この短い語が滑稽なほど引き延ばされて、喧嘩を制止する号令に使われている。

朝次々に登庁してくる猫たちが戸を開け閉めする音。

「ガタッ・・・ガタン。ピシャン・・・

ガタッ、ピシャーん・・・ガタン、ピシャリ

Χραπ! ... Χράαπ-γκουπ! ... Χραπ-γκούουπ! ... Χραπ-γκουπ!

原文はオノマトペを微妙に違えて、四匹の猫たちが次々に入ってくるイメージを出しているのだが、訳文もきちんと音を変えてある。

「鹿踊りのはじまり」

太陽に向かって鹿たちが並んで歌う。

「ぢゃらんぢゃらんの／お日さん懸^かがる。

Γκλιν-γκλαν-γκλιν-γκλιν-γκλιν-γκλαν / Επιάστηκεν ο Ήλιος

「猫の事務所」でも「ジャラジャラジャラジャラン」が使われていたが、類似音を当てるのではなく、発話の意図（大声による制止）が訳出されていた。こちらは、太陽が金属的な音とともに荘厳に現れる場面で、類似の、鐘や鈴の音の類に使われる擬音語が当てられている⁷⁾。

鹿が踊るそばではんの木の葉が鉄の鏡のように輝き、これまた金属的な響きをたてる。(田守 (p.194) は葉と鉄が結び付いた比喩的なオノマトペの例として引用。)

「かちんかちんと葉と葉がすれあって音をたてたようにさえおもわれ」

'Ακούστηκε το θρόισμα των φύλλων που τρίβονταν το ένα πάνω στ' άλλο
葉と葉がすれて出る音には θρόισμα が当てられ（「注文の多い料理店」の「かさかさ」）、こすれあう様態には τρίβω が使われている。但し τρίβω は「こする、もむ、押し（すり）つぶす」の意味だから、金属的な鋭い音を表現するのは難しいだろう。その直前の σαν θρυματισμένος μαντεμένιος καθρέφτης「砕けた鉄の鏡のように」とどの程度関連づけられるか、読者の連想力にかかっている。

もう一つ、オノマトペではないが、特筆しておきたいのは、東北弁で話される鹿同士の会話がギリシャ語方言で訳されていることだ。

「ぢゃ、おれ行って見て来べが。」

Λέου να πάου να το ιδώ!（標準語 Λέω να πάω να το δώ!）

「うんにゃ、危ないじゃ」

Μπάα, πουλύ ιπικίνδυνου（標準語 πολύ επικίνδυνο）

「なにだた、あの白い長いやつあ。」

τι έγινε; Μι κείνου τ'άσπρου του μακρύ;

（標準語 Με κείνο τ'άσπρο το μακρύ;）

ここまでこだわれるのは直接訳ならではの強みだろう。ギリシャ語でも南部方言を基盤とする標準語に対して、北部の方が方言色を残しているのは偶々であるにしても、全てを標準語に訳してしまうと味わいが全く変わってしまう。

「水仙月の四日」

この作品では、雪^は婆んご（雪の精）が吹く吹雪の音が繰り返し現れ印象を残すが、翻訳でも同じく効果的な間投詞が用いられている。

「ひゅう、ひゅう、なまけちゃ承知しないよ。降らすんだよ、降らすんだよ。さあ、ひゅう。今日は水仙月の四日だよ。ひゅう、ひゅう、ひゅう、ひゅうひゅう。」

Φχιούου, φχιούου! Εδώ δε σηκώνει τεμπελιές! 'Ελα ρίχνε χιόνι, έλα ρίχνε χιόνι! 'Αντε φχιούου! Αφού σήμερα είναι 4 του μήνα Ναρκίσσων.
Φχιου-φχιούου, φχιου-φχιου-φχιούου!

この雪婆んこの髪は、

「ぼやぼやした灰いろの髪をした雪婆んご」

と描写されている。田守 (pp.237-8) は「まばらに生えた」と説明するが、翻訳では、

Η Μπαμπώ ...τ' αχτένιστα σταχτιά μαλλιά

のように、αχτένιστα「櫛で梳かない」と解する。('ぼさぼさの'との連想からか。) これも一つの解釈だろう。別の個所の「ぼやぼやつめた^{ほど}い白髪」も Τα παγωμένα, ξέπλεκτα (解かれた), άσπρα μαλλιά としている。

おわりに

オノマトペは表現技法のひとつとは言え、作品世界を形成する重要な要素の一つである。他の言語に翻訳するのは当然困難であるが、様々な手段を使ってその味わいを伝えようとすることは大事であり、検証してみれば、翻訳家の努力はおのずと現れてくる。原文の細かな相違点にまでこだわり、オノマトペの達人に真摯に向き合った女史の労作に敬意を捧げたい。

注

1) 直接訳かどうかは未確認だが、以下の作品が翻訳されている(一部、雑誌掲載のものも含む)。

芥川龍之介「羅生門」「河童」「藪の中」。阿部公房「砂の女」。池澤夏樹「花を運ぶ妹」「イラクの小さな橋を渡って」。井上靖「獵銃」。遠藤周作「侍」「沈黙」。大江健三郎「個人的な体験」。上田秋成「雨月物語」。小川洋子「薬指の標本」「ダイヴィングプール、妊娠カレンダー」「ホテル・アイリス」。桐野夏生「Out」「Real World」。志賀直哉「范の犯罪、剃刀、母の死と新しい母、城崎にて」「灰色の月、妙な夢」。谷崎潤一郎「瘋癲老人日記」。永井荷風「雨瀟瀟」「つゆのあとさき」。三島由紀夫「宴のあと」「潮騒」「愛の渇き」「春の雪」。宮部みゆき「火車」。村上春樹「ノルウェイの森」「ねじまき鳥クロニクル」「1Q84」「アフターダーク」。宮沢賢治「銀河鉄道の夜」。森鷗外「キタ・セクスアリス」。吉本ばなな「アムリタ」。松本清張「点と線」。横溝正史「犬神家の一族」。渡辺淳一「花埋み」。

そのほか、和泉式部の和歌や芭蕉の俳句の翻訳もあるらしい。

2) 例えば、精力的にヨルゴス・セオトカスの翻訳研究に従事された鈴木敦也氏は、菊池寛「恩讐の彼方に」「藤十郎の恋」などの翻訳をギリシャの文芸誌に発表されたそうである（セオトカス、鈴木敦也訳『アルゴー・魔人』（1996年、講談社出版サービスセンター）の田中隆尚氏の「編集後記」による。）

3) Ναγάι Καφού, *Σιγανή βροχή*, ΑΛΕΞΑΝΔΡΕΙΑ (1990), Μτφρ. Παναγιώτης Ευαγγελίδης, 高橋（1991）に詳しい。

4) 翻訳の底本が記されていないので、対応の原文は「[新] 校本 宮澤賢治全集」1995, 筑摩書房、にあたった。ただし、旧かなづかいは現代かなづかいにした。

5) 以上の四つの他に、文全体の中に溶け込んでしまい、特定の語としては現れない場合がある。

「空のすすきをざわざわと分けて」

παραμερίζοντας στο διάβα του τους ασημένιους μίσκανθους του ουρανού

ただし、この同じオノマトペも、別の作品（「注文の多い料理店」）では前置詞句（με θόρυβο「騒音とともに」）により明確に訳出されている。

「草をざわざわ分けてやってきました。」

παραμερίζοντας με θόρυβο τα χορτάρια

6) 原（2013:557）。

7) 田守（p.103）によれば「じゃらんじゃらん」に「ら」を挿入して作られたもの。その意味は、「鐘や大きい鈴などが繰り返し鳴ったり、金属が何度もぶつかったりして発する大きな音」（山口：2003）

γκλαν は辞書に掲載されている（Ακαδημία Αθηνών, *Ιστορικών Λεξικών της Νέας Ελληνικής* ‘γκλάν’）。それによると、「教会の鐘や山羊・羊の鈴の音に関して」使われ、ディオニシオス・ソロモスの例が引かれている（γκλάν-γκλάν τα σήμαντρα / της εκκλησίας「教会の鐘のゴンゴンの音」）。

参考文献

高橋りえこ（1991）「ギリシア語に翻訳された日本文学（1）

—永井荷風作「雨瀟瀟」—」『プロピレア』3号, pp.84-87.

田守育啓（2010）『賢治オノマトペの謎を解く』大修館書店.

原子朗（2013）『定本 宮澤賢治語彙辞典』筑摩書房.

山口仲美編（2003）『暮らしのことば 擬音・擬態語辞典』講談社.